

牧会カウンセリングの確立のために 牧会神学の構築

赤坂 泉

序 言

1. なぜこの特集テーマか

混迷の度を加速度的に増している日本の社会にあって、キリストの教会は福音の真理の確かさを体現しているか。ヤミの深まっていくこの社会にあって、良い知らせを十分に豊かに輝かせているか。社会の混乱の波が押し寄せるなかで、教会自身が、福音の力と豊かさを見失い、困惑し、疲弊してはいないか。

これらの問いが、教会をしてこの度の特集テーマを掲げさせた、と筆者は想定したい。「福音主義神学」誌において、牧会カウンセリングが特集されることに違和感を覚えるのは筆者ひとりではなからう。実践神学のテーマが過去にも取り上げられているとは言え、未だ神学界に「市民権」を得ているとは言いがたい（と筆者には見える）この分野が特集されるのは、上記のような事態への対処が急務であって、その役割の一端を担うことが牧会カウンセリングに期待されていることを示しているからだと考えたい。

2. なぜ今なのか

ひとつには、日本の社会が、あらゆる側面で閉塞感に苛まれ、崩壊の現象に直面している昨今の時代性がある。その物質主義の行き詰まりから「こころの時代」へシフトしようと“掛け声”ばかりが聞こえるが、実体が見えてこない。時代の歪みは、いつも弱者において顕著に表出す

るが、いま、狭義の「こころの病」⁽¹⁾を負う多数の人々があり、さらに新しい病理が次々に提案されている。⁽²⁾もはや個人の問題では済まされない、この社会全体の課題として取り組む必要に迫られている。この「病」の波は、当然のように教会にも押し寄せていて、多数の「病んで」いる人々が教会を訪れている。それは本来は歓迎すべき状況であろうに、その波に対応する備えができていない、と感じている教会の叫びが聞こえている。

もう一つには、福音主義キリスト教界で霊性への関心が高まっていた時代性を認めなければならない。信仰を、どちらかという知的、論理的にとらえる傾向が強かった日本の福音主義キリスト教界が、ダイナミックな信仰の体験を強調する信仰のあり方との対話の中で、自己反省を含めて、真の霊性を求めて模索している。確かに、キリスト者の日常にも病的な様相が散見され、教会が、成熟した霊性で満ちているよりは、当惑し、混乱している、という現状があるように思える。そこに動機づけられて教会史に範を求め、信仰の諸派から借用しようとする霊性追求の営みは、しかし、性急で、未消化で、まさに借り物の感を拭えない。福音主義におけるキリスト者の成熟と教会の成熟への取り組みも急務である。

3. 課題と目標

牧会カウンセリングは、日本のキリスト教界に紹介されてすでに40年余を経過している今でも、教会の自明の営みの一つとしてその役割を

(1) 何を規準に「こころの病」と呼ぶかは、大いに議論の余地がある。神の規準で言えば、おおよそすべての人間は「こころの病」を負っているのであり、その意味では、赤星進の「健康性精神病」という造語に、筆者は親近感を覚える。

(2) 過去十数年をさかのぼって、一般社会にも広く知られるようになったものを例に挙げるだけでも、空の巣症候群、燃え尽き症候群、アダルトチルドレン(AC)、共依存、等々があり、また境界例と称されていた事例が境界性人格から境界性人格障害と呼ばれるようになり、最近では人格障害の一領域として理解されるようになった変遷もある。

確立するには至っていない。一部に積極的な期待や取り組みがある一方で、警戒感や反発も見受けられる。正しく理解され、正しく位置づけられていないために、その本来の使命を有効に果たせないままにしている。紹介され始めた当初からの誤解や混乱が、収束しないまま今日まで続いている。例えば、牧会カウンセリングとは、牧会者が臨床心理カウンセラーの真似事をする事である、という見解があるとしたら、それは明らかな誤解である。牧会カウンセリングは牧会の未知の新機能であって、今の時代の牧会者たちが新たに学び、習得すべき営みでもあるかのような誤解が、教界に混乱をもたらしている。

こうした混乱を越えて、牧会カウンセリングが日本の教界に根付き、教会が主の約束された豊かないのちに生きる助けとなるために、今、何が課題となっているのだろうか。本稿は、カウンセリングの理論や実践ではなく、牧会カウンセリングにかかわるそのような問いを巡って分析と考察を試みる。

今、日本の教界は、牧会カウンセリングがその呼称こそ異なるものの、旧約聖書にさかのぼって、神の民にとって自明の営み⁽³⁾であることを再発見しなければならない。その自明の営みを、近年の臨床心理学などの知見を動員することによって、さらに豊かなものへと成熟させる可能性を追求しなければならない。また、牧会の営みに仕える道具としての牧会カウンセリングの位置づけを整理し、確立する必要があって、そのために、牧会神学の構築が求められる。

これらの課題を整理することによって、牧会カウンセリングが正しく理解され、牧会神学の中に正しく位置づけられて、教会が個人的にも共同体としても主にある豊かないのちに生きることができるようになるために、援助の営みとして用いられることを目指したい。そうするとき、牧会カウンセリングが今日の日本における福音宣教と教会形成のために健全な働きを担うことになると信じるからである。

(3) 詳細は後述に譲る。

筆者は、牧会の現場の人間であり、現場の人間であり続けたい。神学者を演ずるつもりもなく、上記のような重大な動機と取り組む力量のないことを自覚している。しかし、すべての牧会者は牧会神学者でなければならない、と信じているので、その範囲において、この度の招きに応えさせていただいた。私見であり試論であるので、諸氏のご指導にあずかる機会となれば幸いであるし、また読者がさらに論考を深めていただく契機としていただければ感謝である。

現状の把握と分析

牧会カウンセリングに関する日本のキリスト教出版の軌跡から

現状の把握と分析のために、はじめに牧会カウンセリングに関する日本のキリスト教出版の軌跡を概観する。限られた資源の中でなされる出版事業は、概ねその時代の教界の関心やニーズを反映していると考えられるからである。また、書店の店頭で入手できる出版物の傾向を通して現状を推し知ることができるし、神学教育のカリキュラムにも教界の現状が反映されているだろう。

日本における牧会カウンセリングとクリスチャンカウンセリングの歴史を概観し、その観察を通して、日本教界と牧会カウンセリングとの出会いを分析したい。そこに現状の混乱の背景を知る手がかりと、混乱の解決へのヒントを発見したい。

1. 草創期

カウンセリングが米国で一つの学問分野として確立される契機になったのが、C・ロージャズ（と初期には日本語表記されていた）による1942年の *Counseling and Psychotherapy*（カウンセリングと心理療法）⁽⁴⁾ である。その少し以前から精神医学を離れて歩き始めた臨床心理学が、独

(4) Carl Rogers, *Counseling and Psychotherapy* (Houghton Mifflin, 1942).

り立ちして一つの学問領域を形成し始めたのである。カウンセリングという概念が、日本に紹介され、浸透したのも、主としてこのロジャーズ学派の人々の訳業による。

牧会カウンセリングの、米国における独自の発達も、これと並行する時期のことである。アントン・ボイセン牧師が、自身の精神の罹患の経験から *The Exploration of the Inner World*（内的世界への探求）⁽⁵⁾ を著したのが1936年で、ここから始まった臨床牧会教育は、牧会カウンセリングの訓練の有効な手法の一つとして現在に至るまで用いられている。牧会カウンセリングは、臨床心理学とは一線を画する専門領域として（また残念ながら、多くの場合には従来の牧会学とも一線を画して）歩みだし、さらにW・オーツ、P・ジョンソン、S・ヒルトナー、C・ワイズら初期の指導者たちによって、神学教育の一部門としても確立されていった。⁽⁶⁾ 第二次世界大戦の戦中、戦後に、精神のケアの必要に迫られて、臨床心理学が一躍の進展を遂げたことは周知のところであるが、米国の牧会カウンセリングもまた、この時期に大きく前進したと考えられる。

ちなみにヨーロッパでは、米国教界の牧会が心理学とカウンセリングとに過度に傾倒している、として伝統的な牧会スタイルを重んじて来たが、戦後の急速な変化を経て、現在では、米国的な牧会理解が支配的である、という。⁽⁷⁾

2. 日本語出版の初期

1960年代になると米国の指導者らの著作の一部が日本語に訳出され始めた。⁽⁸⁾ 翻訳出版の軌跡は体系的であるよりはランダムであり、偏りが

(5) Anton Boisen, *The Exploration of the Inner World - A Study of Mental Disorder and Religious Experience* (Willett & Clark, 1936)

(6) このあたりの状況については、西垣二一『牧会カウンセリングをめぐる諸問題』（キリスト新聞社、2000年）の三章一節に詳論がある。

(7) R. ボーレン『天水桶の深みにて ころ病む者と共に生きて』（日本基督教団出版局、1998年）の訳者（加藤常昭）解説、240頁。

(8) 西垣（前掲書）によると、1956年のL.J.シェリル『罪の心理とその救い』がその最初である。72頁

あるが、貴重な文献が日本語になった。1963年には、米国で学んだ日本人牧師たちが中心になって、「日本牧会カウンセリング協会」が設立された。これが、言わば牧会カウンセリングをめぐる最初のうねりの到来である。しかし関心の高まりは部分的であり、教界全体を巻き込むようなブームにはつながらなかった。

ヒルトナーの『牧会カウンセリング』⁽⁹⁾が原著から20年を経た1969年になって日本語で紹介されたのは、初期の断片的でランダムな情報をもたらした混乱に対して一定の整理の手がかりを求める力が働いたからだと考えられる。米国においては高い評価を得た良書として広範に用いられているのに、日本では長らく絶版になったまま入手できない状況である。これは、この書の役割が終わった、と日本の教界が判断してしまっていることを示唆している。この書が、牧師の執るべきカウンセリングの姿を描き出そうとし、牧会カウンセリングをめぐる情報の整理を試みた結果、日本教界では、牧会カウンセリングにさらに関心を深めた人々と、この書に聞いて、牧会カウンセリングを「理解し終えた」と考えた人々との棲み分け状態を招いて、初期の模索期に終止符を打った、と筆者は考える。

特に、いわゆる福音主義の諸教会では、たましいの救いと宣教を最優先と考え、救いにあずかった人々の牧会的なニーズに対する関心は高まりを見なかったようである。

3. 第二のうねり

次の盛り上がりは、1980年前後に見られる。1977年に始まるクリエイティブ牧会カウンセリングシリーズ⁽¹⁰⁾やクラインベルの邦訳書⁽¹¹⁾に

(9) 西垣二一訳（日本基督教団出版局、1969年）Seward Hiltner, *Pastoral Counseling* (New York: Abingdon Press, 1949)。

(10) クリエイティブ牧会カウンセリングシリーズ 全九巻（聖文舎、1977～）は、1. 死別と離婚のカウンセリング、2. 危機におけるカウンセリング、3. 豊かな結婚生活を目指して、4. 愛と成熟 - 中年期の夫婦のために、5. 障害者とともに歩む牧会カウンセリング、6. 教会青年へのカウンセリング、7. 神学と教会配慮。

見られるように、個別的・具体的なカウンセリングの課題について考察を深めようとする訳業が続いた。これらは、牧会カウンセリングに関心を深めた一翼にとっては貴重な資料であり、さらなる研鑽の機会となった。しかし、これらが一部出版社に集中していることを見ても、部分的なブームにとどまったように見受けられる。

ところで、米国では、同じ頃から、クリスチャンカウンセリングという一分野が確立し始めた。⁽¹²⁾ 牧会の視点とは別に、キリスト者として、カウンセリングをもって世に仕える、という視点の働きが発展し、急速に拡大した⁽¹³⁾。隣人愛の実践としてのボランティアのカウンセリングから、専門職としてのカウンセリングに至るまで、多様なニーズに応える多様な働きがあって、そうした取り組みや情報が、日本にも紹介されるようになった。

さらに、日本人の精神科医や臨床心理家や牧師らが論陣を張るようになり、米国からの情報を中心にそれを個々に消化・適用しようとした視点や取り組みを提案し、あるいは各々の臨床からの独自の提案をして、多数の出版がなされた。⁽¹⁴⁾ しかし、牧会の視点をいつも持っているとは限らないこれらの著作を、牧会にそのまま応用しようとする混乱も生

8. 自由と解放を目指すカウンセリング、9. 牧師と地域社会 - システムアプローチ、という内容であった。

(11) ハワード・クラインベル『牧会カウンセリングの基礎理論と実際』（聖文舎、1980年）

(12) 例えば、Larry Crabb, *Effective Biblical Counseling* (Grand Rapids: Zondervan, 1977) Gary R. Collins, *Christian Counseling: A Comprehensive Guide* (Word, 1980) などに代表される動きである。

(13) 一つの事例を挙げると、1991年にGary Collinsの呼びかけで結成された American Association of Christian Counselors (AACC <http://www.aacc.net/>)は、現在5万人に近い会員を抱え、教育、出版等、多岐にわたる働きを展開している。

(14) いくつかの事例を挙げるとすれば、赤星進『精神医療と福音』（聖文舎、1970年） 柏木哲夫『人と心の理解』（いのちのことば社、1981年） 工藤信夫『援助の心理学』（聖文舎、1982年） 三永恭平『心を聴く 牧会カウンセリング読本』（日本基督教団出版局、1986年）のほか柿谷正期、有馬式夫、古川第一郎、田中信生などがある。

じたように思われる。

この頃の情報や視点のランダムな拡がりは、牧会カウンセリングを巡る理解をさらに無秩序なものにしていった。自らの信ずるところを雄弁に論ずる人々は、それぞれの学派や視座に立っており、その提案の表面だけに接するときは一見の矛盾があるようにも見える。こうした提案を、背景にあるセオリーを踏まえて理解し、峻別していけるだけの素地を持っていなかった日本教界にとっては、有益な提案であるよりも、さらなる混乱の材料となった。

4. その後

牧会カウンセリングに関心が集まるのと並行するようにして、牧会そのものへの関心が喚起されて行ったように見える。ヒルトナーの『牧会の神学』⁽¹⁵⁾に続いて、J・T・マクニールの歴史的名著『キリスト教牧会の歴史』⁽¹⁶⁾が、原著から36年後に邦訳された。その訳者が、現代の激動の時代における牧会の再発見を願っている⁽¹⁷⁾と記しているが、同様の動機が教界にもあって、牧会の枠組みの中で牧会カウンセリングをとらえようとした力がこの訳業の背景にあるとも考えられる。

ヒルトナーは、実践神学が単に教義学の応用に終始することを憂えて、神学全体の再構成を提案した。即ち、聖書神学・組織神学・歴史神学と実践神学、という伝統的な枠組みに替えて、論理中心の神学分科と活動中心あるいは機能中心の神学分科という枠組みを提案している。その中で牧会神学を「教会と教職のなすすべての活動と機能についてシェパードの視座を与え、これらの観察に基づく反省から一つの神学的体系の結論をひき出すものである」⁽¹⁸⁾と定義してその構築を訴えている。

マクニールは、旧約のイスラエルから20世紀のカウンセリング心理

(15) スワード・ヒルトナー『牧会の神学』(聖文舎、1975年)

(16) J.T. マクニール『キリスト教牧会の歴史』(日本基督教団出版局、1987年)

(17) 前掲書、訳者あとがき、410頁。

(18) スワード・ヒルトナー『牧会の神学』19頁。

学まで牧会(原著ではcure of souls“たましいのいやし”)の歴史を概観しつつ、牧会を、罪の悔い改めと告白と罪のゆるしと教会の規律の問題、教会員の相互的な教化と兄弟的な矯正の問題、魂の配慮と指導に関する問題などの領域で捉えている。

5. いま

さらに、C・メラー編『魂の配慮への歴史』⁽¹⁹⁾が、こころの病と闘う現代人への牧会が豊かなものとなることを願って出版され始めている。

しかし、牧会神学に関わる邦題を冠して現在も刊行されているキリスト教書は、わずかに『総説 実践神学』⁽²⁰⁾の一部の章とピーターソンの『牧会者の神学』⁽²¹⁾など数冊に過ぎず、極めて貧困と認めざるを得ない。

牧会カウンセリングの分野では、現在も書店の店頭で入手できるキリスト教書はほとんど見当たらず、過去の出版物も、アメリカ的な牧会カウンセリング理解に立ったものが多く、牧会学に基盤を求めるよりも、臨床心理学の牧会への応用に執心しているものがほとんどである。

クリスチャンカウンセリングの分野には、L・クラブの『教会の働きとカウンセリング』⁽²²⁾や工藤信夫の『援助者とカウンセリング』⁽²³⁾など大切な数冊があって、教界を助けている。

しかし、牧会カウンセリング、ないしはキリスト教カウンセリングと称しながら、聖書信仰を軽んじて、時代の哲学や価値観に流された主張

(19) C. メラー編『魂の配慮への歴史』全12巻の予定(日本基督教団出版局、2000年~)

(20) 神田健次、関田寛雄、森野善右衛門 編『総説 実践神学』(日本基督教団出版局、1989年)

(21) E.H. ピーターソン『牧会者の神学 祈り・聖書理解・霊的導き』(日本基督教団出版局、1997年) 但し原題は、Working the Angles: The Shape of Pastoral Integrity. であって、神学、という言葉は用いられていない。

(22) L・クラブ『教会の働きとカウンセリング』(いのちのことば社、1993年)

(23) 工藤信夫『援助者とカウンセリング』(いのちのことば社、1992年)。

も散見される。⁽²⁴⁾ 信仰と神学による丁寧な吟味が、常になされ続けなければならない。

6. 分析

教界の出版の軌跡は、牧会カウンセリングが初めから牧会学の歴史と視点を強調することなく、むしろそこから乖離して独歩した形で日本の教界に紹介され始めたことをうかがわせる。そのために、牧会カウンセリングが、牧会配慮であるとか、病人を慰め、いやしのために祈るといった伝統的な牧会機能の延長線上でとらえられることが少なく、むしろ臨床心理学という新しい学問を牧会に応用するという未知の新機能であるかのように誤解されたのではないか。

牧会カウンセリングと称しながら牧会の枠組みから離れたところで取り扱われがちであったために、使命と目的の意識が希薄になり、方向性を見失って、その関心が臨床心理学的な方法論に終始するようになったように思われる。また、教会的なコンテキストの中に置かれることが少なく、個人的な関心や取り組みに偏る傾向も強かった。

方法論に終始した関心が、混乱に拍車をかけた。というのも、臨床心理学には、神のあわれみによって人間に与えられた豊かな知恵だけでなく、罪のゆえに入り込んだ誤った見解も多々ある。背後にある人間観や幸福観や援助の目的意識を吟味しないままで、表面的な方法論ばかりに関心が集中した結果、聖書の教えと対立するようなカウンセリング⁽²⁵⁾をも無批判に取り込むことになり、一層の混乱を招いたことは明らかである。

(24) 例えば、『講座 現代キリスト教カウンセリング』全三巻（日本基督教団出版局、2002年）は、全面的に日本人と日本の教会による包括的で意欲的な、全体としては歴史に残る素晴らしい資料であるが、部分的には、聖書神学を離れて現代思想の潮流におもねるところを感じて、筆者は憂慮している。

(25) ほんの一例として、『自分を犠牲にしない生き方』（長谷川洋三著、三笠書房、1991年）や『自己変革の心理学』（伊藤順康著、講談社現代新書、1990年）といった書名を紹介するだけでも、世俗のカウンセリングの理念を推察していただけると信じる。

例えば「自分を愛する」とか「ありのままに」といった言葉は聖書的に正しく意味付けられるはずの概念である。が、それが非常に偏った意味で用いられて、聖書の教えに反するような用いられ方をしていることも多い。すでに1977年に、心理学が“自己崇拜というカルト”となる危険についてヴィッツ⁽²⁶⁾が警鐘を鳴らしているが、それも日本の教界には届かなかったように思える。それどころか、ポストモダンといわれる時代性の中で、加速度を増して暴走したような主張も少なくなかった。

このことは、個人的な取り組みに偏った、という事情とも関連している。牧会カウンセリングへの関心が全教会的な拡がりを見せない中でも、重荷を持った個人が発言し続けたことは、幸いなことであった。しかし、結果として情報が偏り、関心の分野が偏ったことも否めない。

さらには、牧会カウンセリングの対象を狭義の「こころの病」を持つ人々に限定して考えたり、特定の学派の特定の方法論を絶対視する一本刀的な提案が相互に対立してなされたりしてきたことも、混乱の一因であろう。また、牧会カウンセリングとクリスチャンカウンセリング⁽²⁷⁾とが緋い交ぜにされる傾向もあって、牧会の視点を欠く方法論が牧会カウンセリングに侵入したりしている。

神学教育のカリキュラムの中にも同様の混乱が見られるように思われるが、本稿では詳論はできない。

以上の分析に基づき、次に、牧会学と牧会神学に注目することが必要であろう。その枠組みの中でこそ、牧会カウンセリングが本来の使命を果たせると考えるからである。過去の提案を参照しつつ、同時に日本人性を理解しつつ、聖書神学に基づいた牧会神学を構築することが急務

(26) Paul C. Vitz, *Psychology as Religion - The Cult of Self-Worship* (W.E. Eerdmans, 1977).

(27) 本来は、すべてのクリスチャンカウンセリングが牧会的な視点を持つべきだと筆者は考えていて、その意味では両者を区別すべきでないと思う。またクリスチャンカウンセリングの定義についても多様な提案がある。ここでは、便宜上の一般的な定義として「クリスチャンカウンセリングとは、クリスチャンが臨床心理カウンセリングをもって世に仕える営み」としておく。

である。試論の端緒となるような考察を以下に試みたい。

牧会神学：歴史的考察

牧会カウンセリングの正当な位置づけを求めようとするときには、牧会とは何かを踏まえておく必要がある。その第一歩として、牧会神学の歴史にふれておきたい。ヒルトナーは、プロテスタント主義において 牧会神学 という言葉が最初に用いられたのは、18世紀半ばとし、承認された神学的学問の一分科と見なされたのは1830年以降であるので、牧会神学という用語を越えて歴史に学べ、と提案している。⁽²⁸⁾ それでも、その検討は宗教改革までさかのぼるに過ぎない。

オーデンのPastoral Theologyでは、牧会のルーツを理解することが大切であるとして、現代の神学者よりも古典の神学者に注目すべきと明言している。⁽²⁹⁾ しかし、これもアタナシウスら4世紀までの探求である。

マクニールは、自らの半生の時を要したという大著『キリスト教教会の歴史』⁽³⁰⁾で、旧約時代にさかのぼって魂の助言者に注目し、新約聖書から教会教父時代、初期の修道士の著作から中世まで、さらに宗教改革ならびにそれ以降の諸教派の牧会を精査して20世紀に至っている。まことにその書名にふさわしい内容で、歴史的な名著である。

彼は、その広範かつ詳細な検討を通して、キリスト教教会の本質を、大別して3つの分野で理解し、歴史的に諸教会、諸教派の牧会の理解と方法を紹介している。その3つの分野とは、1. 悔い改めと告白、罪の赦しの宣言、教会の規律 2. 相互的な牧会、即ち、相互的な教化と兄弟的な矯正

(28) スワード・ヒルトナー『牧会の神学』49頁。

(29) Thomas C. Oden, *Pastoral Theology: Essentials of Ministry* (牧会神学 牧会奉仕の本質) (HaperSanFrancisco, 1983), p.7. "I am hoping to offer a classically grounded systematic pastoral theology that is not insufferably dull. I seek simply to bring the available wisdoms of the pastoral tradition into clear, sharp contemporary expression, pertinent to the practice of ministry today."

(30) J. T. マクニール『キリスト教教会の歴史』(日本基督教団出版局、1987年)の原著は *A History of the Cure of Souls* (Harper & Row, 1951)である。

3. 魂の配慮と指導と助言である。第一の分野については、その原点を旧約時代に確認しつつ、⁽³¹⁾ 教会史の各時代にどのように取り扱われたかを詳述している。中世後期(宗教改革以前3世紀間)については、厳しい評価と共に「しかし、この点に関しても、真実な信仰を力説する努力が、止んでしまったわけではなかった」⁽³²⁾と云って、誠実な検証を怠らない。第二の分野は、特に初代教会の歩みの中に根底を求め、⁽³³⁾ それが宗教改革者たちによって再び明るみに出されたことを指摘している。第6章「ルター派教会における牧会」の中で、告白制度が慣習化し、形式化し、軽視されるようになったために、別の牧会手段が必要となつて、個人的・相互的な牧会が強調されるようになった、と指摘している。一方、改革派教会の牧会は、別の手段として私的な勧告や手紙による助言や指導を復興させ、それが広く諸教派で再活用されるようになった、とする。

C・メラー編の『魂への配慮の歴史』は、聖書時代から現代まで63人の ころのみとりて たちを選び出して観察し、その牧会的感化を整理して、今日における牧会のあり方を考えようとする取り組みである。執筆者は、プロテスタント教会に限らずカトリック教会やギリシア正教会にも拡がり、観察の対象は、現代のヒルトナーにまで及ぶ大作で、邦訳出版の完成が待たれる。メラーは、ゼールゾルゲ(魂への配慮)の概念の原点をソクラテス、プラトンにまでさかのぼらせる。そして、個人が、肉体から分離した自分の魂に自分で配慮する、という意味でのゼールゾルゲは、旧・新約聖書にはない、と指摘する。もちろん、聖書では「実質的な牧会的行動」は行われているのであって、心身の現実的な必要のために配慮した新約の教会の牧会行動がある。また、教会戒規を巡っては、四世紀には「既に、教会が行う個別的な牧会配慮についての体系的著述が企てられた」⁽³⁴⁾と述べている。さらに、ゼールゾルゲが、複数の魂への配慮ゼーレン

(31) 前掲書、41頁。

(32) 前掲書、176頁。

(33) 前掲書、70～73頁。

(34) C・メラー「ゼールゾルゲ(魂への配慮)の概念の誕生と形成」『魂の配慮の歴史 聖書の牧会者たち』(日本基督教団出版局、2000年)44頁。

牧会神学の構築をめざして

ゾルゲへと変革して、ルターにおいても、また18世紀に至るまで「しきりに用いられた」と言う。にもかかわらず、ゼールゾルゲの概念の持つ教会論的な意味合いが失われ、牧会が、全く個人的な意味で理解されるようになっていくことを厳しく指摘し、それは「ゼールゾルゲの概念が元々プラトンに由来することに理由がある、と私は思う」⁽³⁵⁾として注意を喚起している。

日本では、キリシタン時代には牧会を神学的に考えるいとまもなく、キリストの教会を建てることについて神学的にも聖書的にも考えられていなかった、と井出は指摘し、さらにプロテスタント宣教においても学問や論理を重視する西洋化思想の風潮の中で、実践神学の部門を軽視した、と述べている。⁽³⁶⁾

このように牧会神学の歴史を垣間見ただけでも、牧会を神学的に検討し、その結実を蓄積し、体系化するような取り組みが多くはなかったことに気づかされる。教会が、自らの営みについて神学の裏付けを求めず、この世の流れにしたがって歩みだすときに、次第に聖書の真理から離れて、誤った歩みに流されていったことは歴史の教訓である。今、牧会カウンセリングが直面しているのは、まさにそのような状況である。世界でも同様であろうが、とりわけ日本の教界が直面している混乱と閉塞感の中では、牧会神学の確立が急務である。教会のどんな営みも、聖書の神学に基盤をおき、そこで検証され続けなければ、正しく機能し得ない。

牧会カウンセリングも、聖書の神学に根ざした牧会神学に基盤を置いていなければ、正しく歩み得ない。現状は、神学によって検証されない経験論が牧会を混乱させ、神学の検証を求めない体験主義が教会を混乱させているのではないか。牧会神学の構築と確立が急務なのである。

牧会とは何か、という検討が牧会神学の第一の課題であろうが、すでに、ここから神学の基盤が脆弱であることを痛感させられる。牧会の定義においてさえも、神学のコンセンサスがないことを発見するからである。総じて包括的な定義で、曖昧な輪郭を描く定義が多く、また経験論的に取り扱われることが多くて、そこでは、共通の地盤で議論することが困難である。ヒルトナーは、宗教改革以来の牧会理解を二つに大別し、牧師のなすすべてのことが牧会である、という第一の理解も、牧会は説教等と並ぶ牧師の機能の一つである、という第二の理解も、「はっきり言えば、この両者とも誤り」⁽³⁷⁾とする。そして、それぞれが表現している真理の一面をシェパーディング(牧羊)の視座の概念をもって統合することを提案している。

トゥルナイゼンの「教会の説教において、一般的に、つまりすべての人々に告げられた福音を、特殊な形で、個人に伝達すること」⁽³⁸⁾という牧会の定義と、井出の「個々の人に具体的に語りかけられる神のことばに対する、正しい応答の形成に仕えていく働き」⁽³⁹⁾という定義とは、包括的でありながら具体的でもある。確かに、聖書は個別的な伝達と、個別的な応答を求めており、加えて、共同体としての応答を求めている。

これらは、どれも聖書神学的な作業の産物であると信じるが、借り物にとどまらないために、本稿なりの作業をしておく必要がある。

1. 「牧会」ということば

牧会ということばが、聖書の牧羊のイメージから出ていることは明白である。「良い牧者」であるお方が、「わたしの羊を牧しなさい」⁽⁴⁰⁾と召してくださっていることにその基礎を持っており、また旧約聖書の中にも、

(35) 前掲書、47頁。

(36) 井出定治『信徒といっしょの牧会』(いのちのことば社、1997年)15～18頁。

(37) スワード・ヒルトナー『牧会の神学』12頁。

(38) E. トゥルナイゼン『牧会学(I)～慰めの対話』(日本基督教団出版局)13頁。

(39) 井出定治『信徒といっしょの牧会』15頁。

(40) ヨハネの福音書21章16節。

神を羊飼いに、神の民をその牧場の羊になぞらえている箇所も多い。

詩篇23篇、イザヤ書40:11などは、神ご自身がどのように羊を養ってくださるかにあつての具体的な描写であり、さらにエゼキエル書34章など、神が神の群れを託すときに牧者に期待なさる務めを推し知ることができる箇所がある。新約聖書でも、ヨハネの福音書などに見る通り、主イエスが群れを牧者に託し、使徒の働き14:23、20:28、またペテロ5章や牧会書簡などに見るように、さらに次の世代の牧者が召されて、牧羊の務めを受け継がれていったことを知る。また、そこで期待されている牧者の務めを知らされる

日本語の「牧会」という訳語について、加藤は、ヨーロッパでこれに相当する語（ドイツ語のSeelsorgeと英語のpastoral care）が意味するものとの間にかつての相違がある、と述べて、新しい訳語の必要を訴えている。⁽⁴¹⁾しかし、牧会という日本語がいつも共同体に注目して、個別的な牧会対話を視野に入れないことばである、という指摘は、必ずしも正確ではないのではなからうか。牧会という日本語は、福音主義諸教会では、聖書の用語に沿つて、個別的な意味でも共同体的な意味でも理解され、用いられているように思われる。

2. 牧会の機能

次に、牧会についての聖書の多数の言及を通して、その機能を整理する必要がある。ここでは、作業の結果だけを概括して紹介する。

a. 育養

神の群れを神ご自身が育て、養ってくださる。牧者の務めは、自分が群れを養育するのではなく、群れを「みどりの牧場」へと向かわせて、神のみことばに養われるように導くことである。また、生ける神の内住に強められて歩めるようにと、群れを導くことである。個々人が神に聞き、神に従

(41) R. ボーレン『天水桶の深みにて～こころ病む者と共に生きて』の訳者解説、247～252頁、C・メラー編『魂の配慮の歴史I 聖書の牧会者たち』の訳者まえがき、23～25頁。

う歩みを確立できるように導くことであり、同様に、共同体としてみことばに聞き、みことばに従つて歩めるように導くことである。これが牧会の第一の機能である。

b. 保持

神のものを神のものとして神の前に保持する働きも牧会の機能である。それは、神の子どもたちが各々の居るべきところに居るように、あるいは間違つた教えが教会を乱すことがないように見張ること、弱っているものを慰め、励ますこと、気ままなものを訓戒すること、迷い出たものを連れ戻すこと、と多岐にわたる働きである。罪の悔い改めと告白を促し、みことばの權威によつてその処置をすることが求められる。

c. いやし

病んでいるものに心を向け、配慮し、いやすことも牧者の務めである。身体のももこころの病もたましいの病も、牧者の配慮の中に委ねられていて、まことのいやし主の僕として機能することが求められる。

d. 指導（霊的指示）

約束されているいのちの豊かさを、さらに豊かに体現できるように教え導く、また神の民に託されたこの世にあることの使命を正しく理解し、実現できるように教え導く、という指導の務めも牧者に課されている。群れの模範となるべきことも指導の一部であらう。

3. 牧会の方法と牧会カウンセリングの位置づけ

牧会の本質については、もつぱら聖書に学ばねばならないが、それを果たす方法については、聖書とともに教会の実践と先人の経験とに学ぶことが有益であらう。この峻別が重要である。方法論を本質論と緋い交ぜにして、牧会の本質を経験論的に捉えて実践し、また伝達していくことの危うさは、歴史が証明している。

方法を考察する前段階として、人間理解を深める必要性を強調しておきたい。牧者が群れを良く理解し、個々の羊の真のニーズを正しく理解していることは、牧会の前提条件である。個々人の生活と思考と感情とに對す

る敏感さを磨き、群れのグループダイナミクスを注意深く知ることが大切である。日本にある教会を牧する者は、日本人の心性について理解を深め、日本人の社会構造の意識や宗教観や死生観について知見を広げることも大切である。そのためにも、社会学や宗教学や文化人類学などの提案に敏感であることは、大きな助けである。また個別の人間理解や正確なコミュニケーションのために、心理学の見解やカウンセリングの技法が助けになる。これらは、牧会の方法を豊かにする助けである。(しかし、これらが牧会の本質を変容させるものであってはならない。)また、牧者の自己理解という点も、牧会の実際を考察する際に、方法以前の大変重要な要素である。

育養の主要な方法は礼拝である、と信じる。神の民は、共同体としても、個人的にも、礼拝によって整えられ、養われる。公同の礼拝における説教と個人の礼拝生活におけるみことばとが正しく育養の務めを果たしているように整えることは、牧者の責務である。礼拝において、人がまことに神と出会い、いまの現実のニーズに語りかけるみことばを受け取り、神に 응답して服従と献身を新たにし、そのようにして神の羊として養われて、成長する。このプロセスを整えるために、カウンセリング心理学の知見を動員することも、牧会カウンセリングと言える。

聖書の体系的な教育も同様の意味において牧者の責務であり、福音宣教のことばも、育養の第一段階である。ここでも、人のこころの理解を深めておくことは、いつも大切であって、カウンセリングマインドを持って聖書教育に当たり、福音宣教に立つことが有益であるが、これも広義の牧会カウンセリングと言えるのではなからうか。

保持の働きにおいても、牧会カウンセリングは重要な務めを担う。羊が育養されて、自分のいるべき場所がわかったとしても、自分を冷静に、公平に知ることができないと、迷い出ていることにさえ気づくことができない。自己理解は、カウンセリングの重要なテーマのひとつで、個々の羊が自分を良く知ることができるようになるのが、牧会カウンセリングの務めである。1テサロニケ5:14を見ても、弱っているのか、小心なのか、それとも気ままなのか、を見極めることが求められる。羊が自分の状態に自

分で気づき、認められるように助けるのが、牧会カウンセリングである。

罪の告白とその処理も、牧会の重要な働きのひとつである。これは、教会史をふりかえると、告解が義務化されたり、しかもその内容が詳細に規定されたり、あるいは形骸化したり、また聖職者を権威づけるために乱用されたり、と多くの混乱を重ねてきた分野である。罪の告白を言葉の表面だけで聞くにとどまらず、こころのうめきを丁寧に聴くことができ、その痛みを、みことばの権威によっていやすことができるためには、深い人間理解が必要で、ここでも臨床心理学の助けが有益である。

慰めといやしのためには、牧会的な訪問や個人的な牧会対話が重要な役割を果たす。個人的な対話は、臨床心理学の最も活かされる分野である。正確で有意義な対話が成立するためには、牧者が自らを良く理解し、羊を良く理解して、その上で、相互に理解を共有したコミュニケーションを維持することが求められる。独りよがりな慰めといやしの対話ではなく、そこに真に御霊の働きを認めることのできる真実な対話が求められる。ここでも、カウンセリングマインドの果たすべき役割は大きい。

指導も、強制であっては力がなく、各人が自分の信仰に立った決断を選択し、選択し続けることができるように、教え、促し、励まし、戒めるのであるが、御霊の働きに敏感で、また羊の状況に敏感でなければならない。

さらに、見張り人としての祈りや訓戒の務め等々、牧者の務めは多岐にわたる。

これらについての検討と蓄積と体系化が、牧会神学の基本的な作業である。すでに紹介したヒルトナーの牧会神学の定義⁽⁴²⁾に加えて、オーデンの「牧会神学とは、牧師の務めと機能を検討する神学の部門である。神の自己啓示の産物を検討するという点でそれは神学であり、牧師の役割と任務と責任と働きに関わる産物を取り上げるという点で牧会的である」

(42) 上記 ・4参照「教会と教職のなすすべての活動と機能についてシェパードの視座を与え、これらの観察に基づく反省から一つの神学的体系の結論をひき出すものである」

⁽⁴³⁾というコメントも踏まえて、教会神学についての考察を深め、ひとつの神学分科としての構築を進めねばならない。

教会カウンセリングの成熟を目指して

教会神学の基盤の上で、教会カウンセリングは正しく、有効に機能することができる。従って、教会神学の構築の十分な作業を経ずに、教会カウンセリングの成熟を論じることは性急である。それでも、いくつかの確認をしておくことが有益であろう。

そもそも、教会カウンセリングの定義が未確立である。例えば西垣は、一番広い定義として「牧師あるいはキリスト者が、教会、キリスト教会というセッティングにおいて行うカウンセリング」⁽⁴⁴⁾とするが、大きく包括的に定義しようとする、いきおい、教会カウンセリングの本質とその輪郭を描き出すことにおいては曖昧で不鮮明になる。有馬の「生き生きと成長する人間関係において、相互に魂を包み合い、神の救いによる完全を目指す歩みである」⁽⁴⁵⁾という定義は、カウンセリングの内容と目標にも言及した定義であるが、教会的な視点が希薄である。

前項の作業とこれらの手がかりを踏まえつつ、本稿では、教会と教会カウンセリングを次のように定義しておく。「教会とは、福音を、個別的、応用的に伝達することによって、個人が福音の豊かさに生かされ、互いの交わりを通して教会が福音の豊かさを体現できるように導く働きかけである。この目的達成のためになされる対話と神のみこころの方向へ押し出す働きかけが教会カウンセリングである。」

教会カウンセリングは新しい機能ではなく、その呼称こそ異なるものの、旧約聖書にさかのぼって、神の民にとって自明の営みである、と前述した。このことは、すでに前項からも十分に推察できるが、加えて聖書の中にそ

の論拠を確認しておく。例えば、出エジプトの民の間に立てられたかしらたち⁽⁴⁶⁾は、神のみこころを求めてモーゼのもとに集中した民が、個々の生活状況と必要に応じて神のみこころを實踐できるように援助する務めを担ったが、これは、まさに上の定義の教会であり教会カウンセリングである。他方、アロンの金の子牛の事件⁽⁴⁷⁾においては、民の不安が、神のみこころに沿ってではなく、人の経験と期待に沿って取り扱われたときの失敗を見るが、これはアロンの教会の失策である。預言者たちも、神のことばを預かり、伝えただけでなく、その実践のために個人的に関わり、働きかけた。アマレクを聖絶しなかったサウル王の前に出たサムエル⁽⁴⁸⁾やダビデ王の前に遣わされたナタン⁽⁴⁹⁾やアハズ王の前のイザヤ⁽⁵⁰⁾など、多数の事例がある。「ああ、わたしの牧場の群れを滅ぼし散らす牧者たち。」と始まるエレミヤ書23章からは、預言者や祭司にも、神を侮るかたくなな心の民を戒め、導く務めが期待されていることを知る。同じ章⁽⁵¹⁾には、主のことばに聞かず、自分の心のままを語り、しっくいの上塗りするような発言を繰り返す偽預言者についての警告もあって、教会者はその轍を踏まないよう、良く自戒する必要がある。また、新約の教会のなかに立てられた牧者たちとその務めについても、上の定義の教会カウンセリングそのものであるような記述を多数発見する。⁽⁵²⁾

このように、今日「教会カウンセリング」と呼ばれている営みは、教会にとって新しい機能ではなく、むしろ自明の働きであったことを確認できる。ところが、この自明のはずの営みが、教会史のなかで、いつしか特殊・特別な営みに変容してしまったのではないだろうか。この点は精査が

(46) 出エジプト記18章。

(47) 同 32章。

(48) サムエル記第一15章。

(49) サムエル記第二12章。

(50) イザヤ書7章。

(51) エレミヤ書23章(エゼキエル書13章にも)。

(52) 例えば、ガラテヤ書6:1、テサロニケ第一5:14、テモテ第一6:17～19、テトス1:9、同2章などは、いずれも、本稿の定義するところの教会カウンセリングそのものであると言える。

(43) T. C. Oden, *Pastoral Theology* p. x.

(44) 西垣二一『教会カウンセリングをめぐる諸問題』15頁。

(45) 有馬式夫『教会カウンセリング入門』(新教出版社、1996年)6頁。

必要であるが、本稿では、聖書の中では自明であって神のことばに裏打ちされていた牧会カウンセリングが、現代においては、特殊な営みと見られ、また人間の経験に拠ることが多い、という点だけを指摘するにとどめる。

特殊なものと見られた牧会カウンセリングは、少数の、特殊技能を持つ者の専売特許のように見られて、聖書の世界と結びつけられることなく、世の新しい知恵を牧会に応用する、牧会の新しい機能であるかのように考えられるようになった。そして、「職人芸」⁽⁵³⁾のようにして後進に伝授されるべきものと考えられるようになった。

そのような発想には、自明な限界といくつかの問題点がある。

・臨床心理学への偏向と依存

臨床心理学を牧会に応用しようとするときに、人間観であれ、幸福観であれ、臨床心理学の提案が、聖書によって検証されないままで、牧会の営みに入り込む。そうすると、神のみこころよりも人間の経験や思索の方が重んじられる、という間違いを簡単に犯すことになる。

・牧会の機能の偏った強調

聖書によって体系づけられていないために、牧会の機能が部分的に看過されたり、偏って強調されたりする。訓戒ばかりが強調される牧会や、いやしばかりに偏った牧会も、決して珍しくない現状がある。

・自己目的化する

聖書の教会論を軽視して、牧会カウンセリングが自己目的化する危険もある。

・主体と客体との両方における混乱

特殊な営みと考えるときに、万人の相互牧会という視点が失われ、「牧師のすること」と限定的に理解されやすい。井出⁽⁵⁴⁾の指摘の通りであり、熊澤⁽⁵⁵⁾も同様に牧会は「共同体としての教会のわざ」であり、牧

師個人に限定されるべきでないことを強調している。一方、特殊な営みの対象を狭義の「病者」に限定して理解する傾向も強く見られる。

他にも様々な問題があるろうが、これらの問題を繰り返さないためにも、牧会カウンセリングが、牧会の営みとして正しく位置づけられ、牧会神学の中で意味付けられて行かねばならないのである。そのようにして牧会カウンセリングが、本来の「自明の営み」としての立場を回復し、牧会神学の基盤上に確立したうえで、臨床心理学の知見を、牧会の務めのために援用しようとするのが、成熟した牧会カウンセリングへの方向性であると思われる。

心理学と神学の統合については、無数の立場や態度があって、それを分類する試みも多数なされてきたが、その中で多くの文献で引用されるのが Carter & Narramore の提案⁽⁵⁶⁾である。彼らが勧める第四の立場の統合主義に沿って、さらに一歩進めたところに、山口の「リサイクリングモデル」がある。これは、神学と心理学の接点について、「聖書から出発し、世俗心理学に触発されながらもう一度聖書心理学を掘り下げるといふもの」⁽⁵⁷⁾という優れた提案である。

世俗の心理学の中にも、神の恵みとして与えられた知恵や洞察がある。人間観などの根底的な相違もあるが、それでも、ひたすら人間の心理を観察し、洞察しようとしている人々による心理学の営みの中には、正当で優れた洞察も少なくないのである。それも神の恵みの一部分である。とすれば、それらを正しく捉えて、神のわざに活用することは、神の恵みの賜物の管理・スチュアードシップという点からも、オプションではなく、必須なのである。

(56) John D. Cater and Bruce Narramore, *The Integration of Psychology and Theology* (Grand Rapids: Zondervan, 1979)は、心理学と神学の統合についての過去の提案を、1. the AGAINST model, 2. the OF model, 3. the PARALLELS model, 4. the INTEGRATES model の4種類に大別している。1. 対立や、2. 一方が他方を飲み込む形や、3. 単なる並立、ではなく、第4の統合の方向性を勧めるこの小著は、今日も有効な区分・推薦である。

(57) 山口勝政「神学と心理学の接点の解釈について—聖書の統合主義の立場から—」『聖書と精神医療』第九号（聖書と精神医療研究会、2000年）25～36頁。

(53) 赤坂泉「牧会のニーズに応える期待を」『聖書宣教会を支える祈りの群』誌第五号（聖書宣教会を支える祈りの群、1998年）

(54) 井出定治『信徒といっしょの牧会』

(55) 熊澤義宣「現代における牧会」『アレタイア』第三号（日本基督教団出版局、1993年）4～8頁。

筆者の確信は、「戦略的な選択主義」strategic eclecticismである。心理学の洞察と提案を、特に二つの規準をもって分別して、正しく牧会に活用していくことが正しいと信じる。それは、山口の提案のように、その洞察が、聖書に照らして正しいか、という第一の規準と、さらに、その提案が聖書の教える牧会の目的に正しく沿うものであるか、という規準である。これらの規準をもって臨床心理学を牧会のわざに援用するところに牧会カウンセリングの成熟があると考え。ここでも、何が聖書の教える牧会であり、その目的であるのかを正しく理解するために、牧会神学の基盤整備が必須なのである。

結 び

牧会カウンセリングを巡る混乱の根本的な原因は、それが牧会のわざとして位置づけられることがならず、牧会神学という基盤を持たない（あるいは、求めて来なかった）ことにある、と述べてきた。

教会と社会の直面している今日の困難な状況について、牧会カウンセリングに一定の役割を求めるならば、牧会の神学を構築することが、最初にして最重要の課題である。その際、ボンヘッファーが神学の誤用について「ひとたび神学の助けをかりて自己を正当化し始めた者は、サタンの指の中にある。」⁽⁵⁸⁾と厳しく警告した言葉を覚えておきたい。どの神学も、どこまでも聖書の神学に基づく営みでなければならないのは当然のことであって、牧会神学も、経験の学や応用の学にとどまることなく、聖書に基づく神学として構築されていかねばならない。

そのような土壌を得て牧会カウンセリングが成熟の方向をめざすなら、牧会と教会形成のために秩序ある有益な働きを担うことができる。福音の豊かさをその身をもってあらわすクリスチャンが養われ、真理を確信して力強く歩む教会が建て上げられていくために、牧会カウンセリングがその

本務に励むなら、日本の社会は、福音の力を教会の中に見ることができると信じる。それこそが、主の民である私たちすべての願いである。

主よ、あわれんでください。

（日本バプテスト宣教団 伊勢バプテスト教会）

(58) D. ボンヘッファー 『説教と牧会』（新教出版社、1975年）194頁。